

令和3年度 前期末 人間学部

授業評価アンケート調査、学修時間等に関する報告

はじめに

本報告書は、令和3年度前期に開講された科目の内、学生による授業評価が実施された109科目についてまとめたものである。授業評価の各項目の平均得点および「全体」の平均得点について検討した。また、担当者各自が個別に設定する質問項目の評価点については、各科目間で比較できないため、本報告書では扱わないこととする。

(1) 共通教養科目

回答のあった共通教養科目に関する授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図1（心理学科12科目）、および図2（コミュニケーション学科13科目）にそれぞれ示した。図1に示された心理学科の学生の延べ人数は468名で、各学年それぞれ1年生=367名、2年=87名、3年=9名、4年=5名であった。また、図2に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は267名で、各学年それぞれ1年=188名、2年=55名、3年=18名、4年=6名であった。昨年と比べると、心理学科の延べ人数はほぼ同数であるが、コミュニケーション学科のそれは前年を下回っており、1・2年生の落ち込みが顕著である。また、過年度と同様、該当の単位をそれまでの学年で既に修得可能なことから、両学科ともに3、4年生の受講数が少なかった。

心理学科では、全項目の評価と各学年の評価の両面において昨年とほぼ同程度の評価となっている。一方、コミュニケーション学科でも昨年度の評価と比べると今年度の評価は全体的に高くなっている。今年度は、2年生の評価が4項目（授業内容、授業方法、総合評価、全体）ともに高止まりしている。一方、3年生の評価は昨年度と比べると概ね0.2~0.4ほど低くなっている。

両学科の2年生（つまり、昨年度の1年生）のコーホートで見ると、授業内容・授業方法・全体の評価ではさほど点数に差が出なかったが、総合評価の項目では両学科とも本年度のほうが若干点数が上がっている。この点に関しては、オンライン授業と対面授業の違いに起因する可能性が高いので、対面授業が多くなる本年度後期の動向に注目する必要がある。

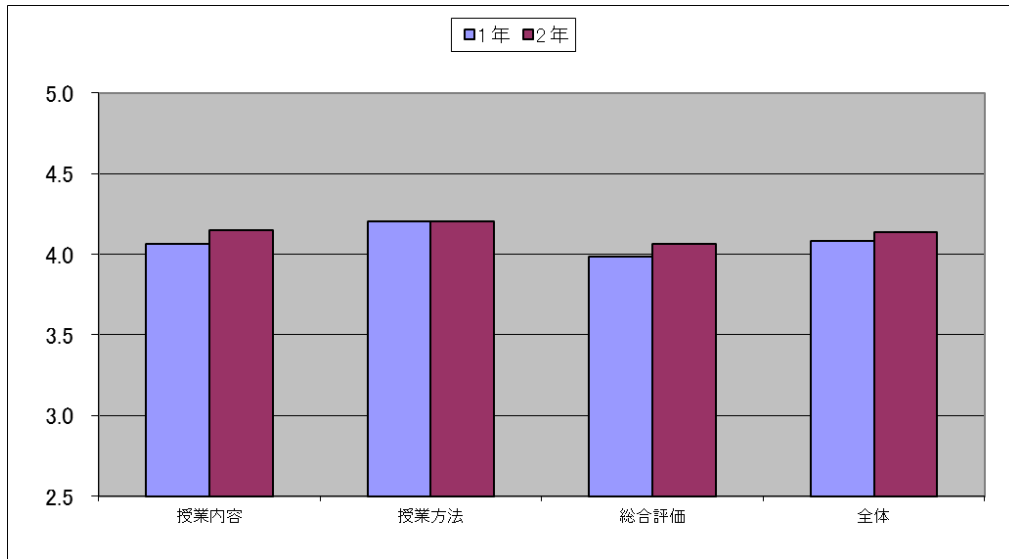


図1 心理学の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=367名、2年=87名

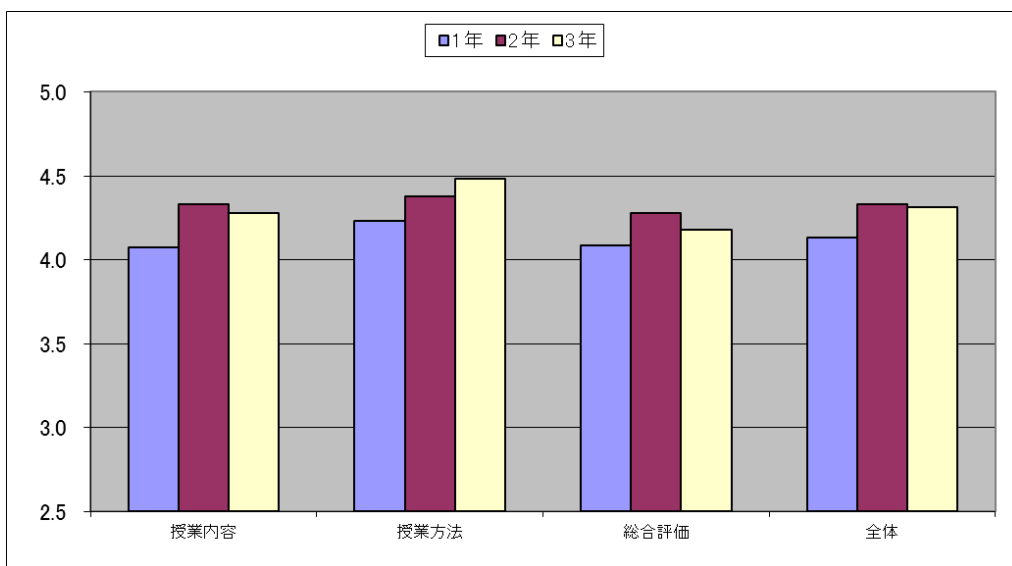


図2 コミュニケーション学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=188名、2年=55名、3年=18名

(2) 共通語学科目

回答のあった共通科目における語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図3（心理学科 11 科目）、および図4（コミュニケーション学科 10 科目）にそれぞれ示した。図3に示された心理学科の学生の延べ人数は184名で、各学年それぞれ1年=138名、2年=43名、3年=3名であった。また、図4に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は122名で、各学年それぞれ1年=80名、2年=41名、3年=1名であった。

心理学科においては、1・2年ともには4点を超える高い評価であり、2年は1年より高く4.5点前後と全体的に高く評価されていた。また、昨年度と比べると全項目で2年生の評価が相当高くなっているのが見て取れる。一方で、コミュニケーション学科においても、すべての学年で全体的な評価が高くなっている。また、昨年度よりも今年度はすべての項目で高くなっている。

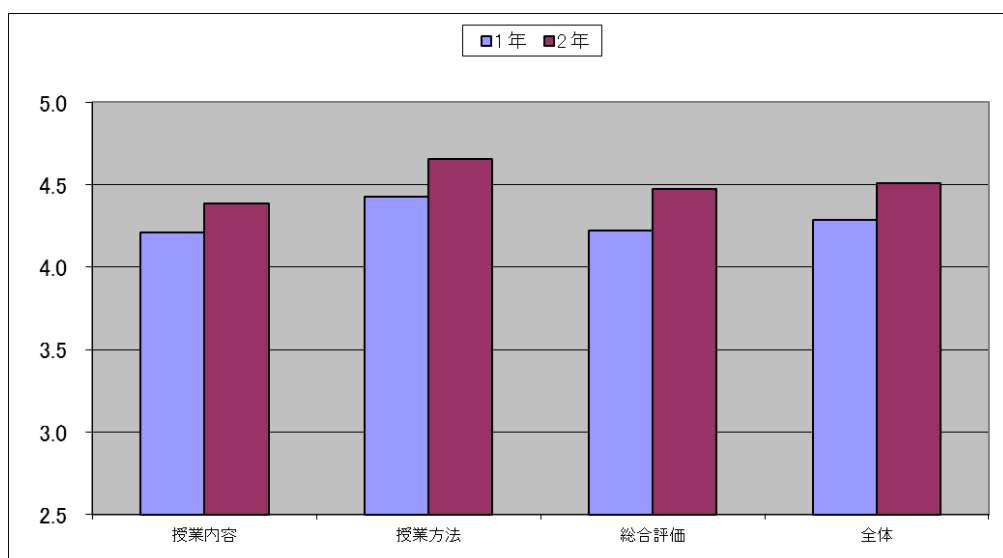


図3 心理学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=138名、2年=43名

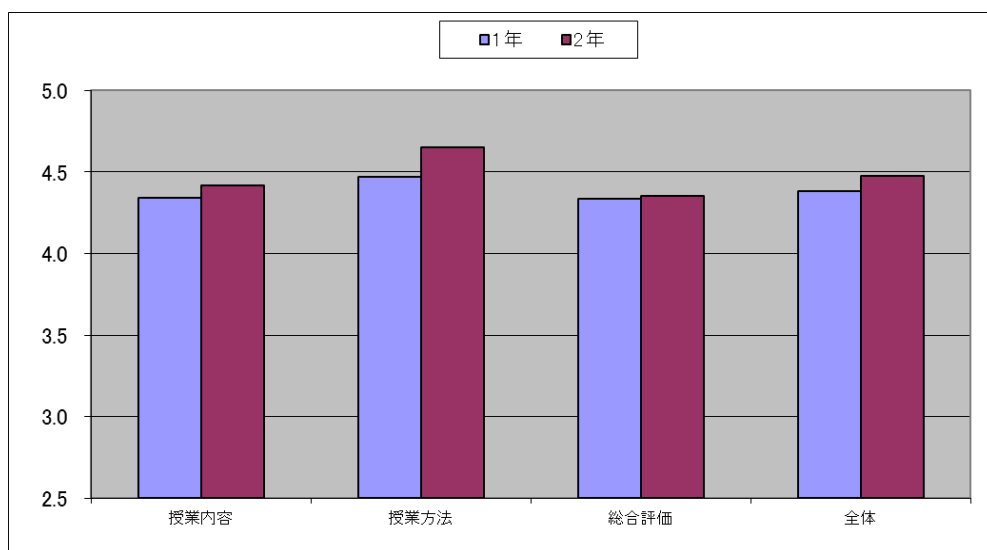


図4 コミュニケーション学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=80名、2年=41名

(3) 専門科目

各学科の専門科目（心理学科 26 科目、コミュニケーション学科 46 科目）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図 5（心理学科）、および図 6（コミュニケーション学科）にそれぞれ示した。図 5 に示された心理学科の学生の延べ人数は 1,499 名で、各学年それぞれ 1 年=265 名、2 年=638 名、3 年=540 名、4 年=56 名であった。また、図 6 に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は 952 名で、各学年それぞれ 1 年=307 名、2 年=367 名、3 年=206 名、4 年=72 名であった。

心理学科では、昨年度の評価点と比べて今年度は若干低くなっている。この傾向はどの学年にも見られたが、特に 1 年生と 4 年生で顕著であった。項目別で見ると、4 年生が 4 項目全てで低い点を付けており、授業方式の違いに起因するものなのか精査する必要があると思われる。逆にコミュニケーション学科においては、昨年度と比べると本年度は 1 年をのぞく 2~4 年の評価点が高くなっており、3 年は微増傾向、2 年と 4 年で前年度よりも明らかに高くなっている。学年別に見てみると、学年が上がるごとにすべての項目で評価点が高くなっているのが興味深い点である。

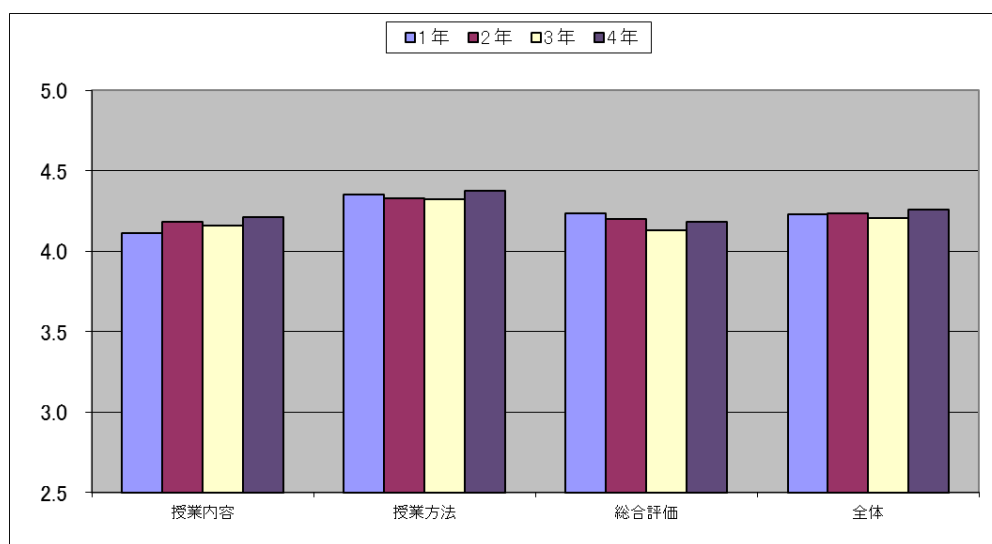


図 5 心理学科の専門科目に関する授業評価点
延べ人数 1 年=265 名、2 年=638 名、3 年=540 名、4 年=56 名

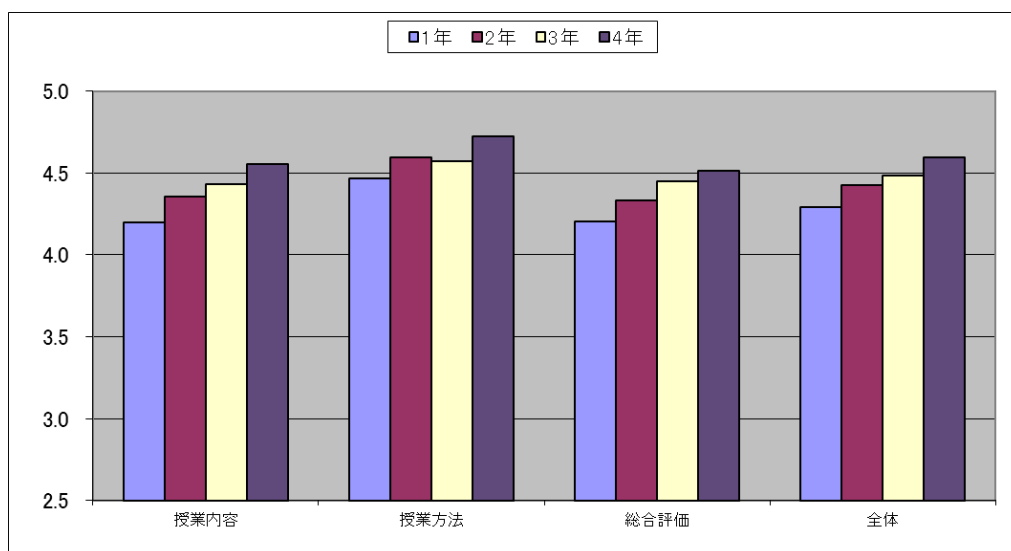


図6 コミュニケーション学科の専門科目に関する授業評価点
 延べ人数 1年 307名、2年=367名、3年=206名、4年=72名

(4) 共通科目と専門科目の比較

本節以降 7 節まででは、科目の履修形態や、教室環境など、受講生の授業意欲、態度などに影響を与えると考えられる要因について、授業評価における評価点の平均値および標準偏差を指標とした比較検討を行った。本報告書で取り上げた具体的な要因は、科目の履修形態（共通科目と専門科目、必修科目と選択科目）、科目の履修者であった。本節以降の図の作成に利用した調査対象総科目数は 109 科目であったが、学部共通科目 7 科目は両学科の学生がほぼ半数ずつ履修しているため、学科別の評価点の平均値および標準偏差を求めた関係上、調査対象から除いた。

図 7 は履修形態ごと（共通科目と専門科目）の評価点を学科ごとに示したものである。分類した共通科目および専門科目の数は、心理学科ではそれぞれ 13、24 科目、コミュニケーション学科では、13、43 科目であった。

昨年度までと同様に、両学科とも共通科目より専門科目が少しだけ高い傾向が見られた。かつ、両学科の共通した特徴として、2 年の評価がおしなべて高くなっている。本年度の心理学科では履修形態による違いがほとんど見られなかった。しかし、専門科目での評価が昨年度とほぼ同程度である一方で、共通科目は昨年度と比べて評価が高くなっていることが分かった。一方、コミュニケーション学科では昨年と同様、専門科目の方が若干高い評価が得られている。ただし、昨年度と比べると共通科目と専門科目の両方の評価が前年よりもかなり高くなっている。コミュニケーション学科の学生は、オンライン授業よりも面接型授業を好む傾向があるのかもしれないため、後期も引き続き学生の評価に留意する必要があるだろう。

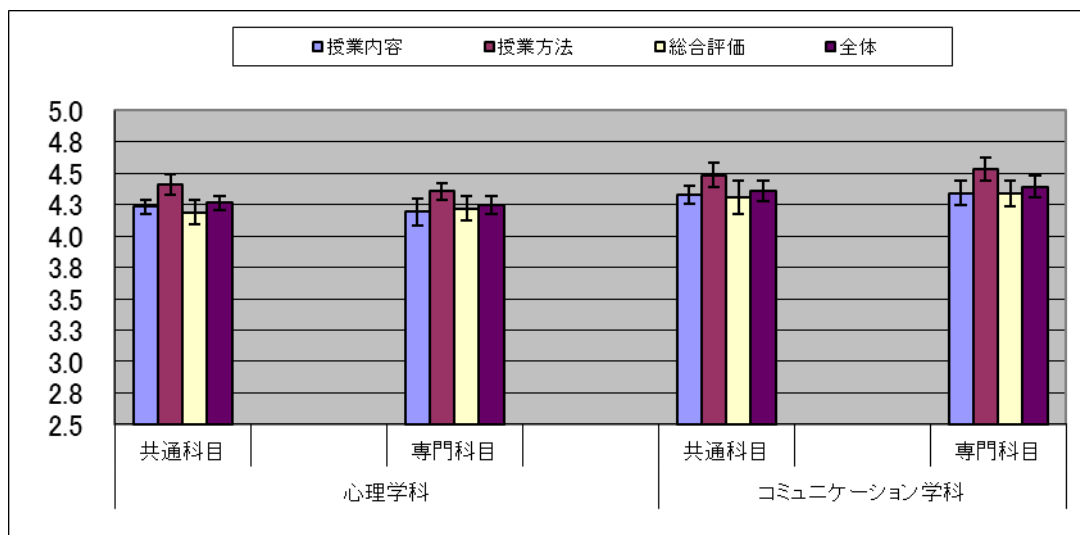


図7 共通科目と専門科目別の平均授業評価点 (±SD)
 共通科目と専門科目数は、心理学科で13、24科目、コミュニケーション学科で13、43科目

(5) 必修科目と選択科目の比較

図8は別の履修形態ごと(必修科目と選択科目)の評価点を学科ごとに示したものである。分類した必修科目および選択科目の数は、心理学科ではそれぞれ9、28科目、コミュニケーション学科では、11、45科目であった。昨年度との比較で見ると、本年度は両学科ともに必修科目、選択科目の両方で高くなっている。

心理学科では必修科目、選択科目の双方で昨年度より評価点が上昇している。コミュニケーション学科においても必修科目では上昇しているが、特に選択科目では評価点の上げ幅がかなり高くなっている。両学科に共通していることであるが、授業方法への評価が他の項目と比べて高くなっている。これは昨年度のオンライン授業との比較で面接型授業への評価が相対的に高くなっていると捉えることもでき、面接型授業に対する需要が高いのかもしれないために今後とも注視し続ける必要があるだろう。

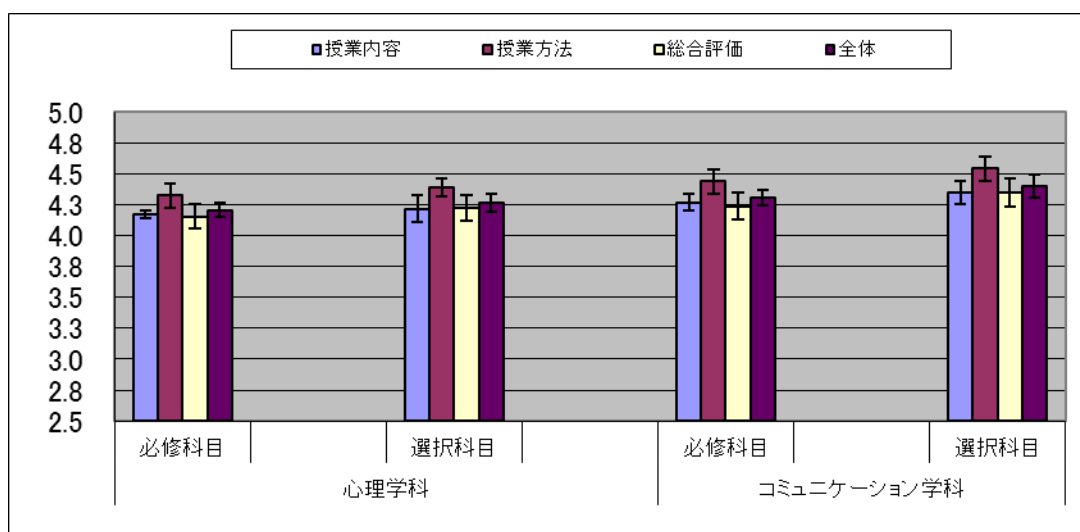


図8 必修科目と選択科目別の平均授業評価点 (±SD)
 必修科目と選択科目数は、心理学科で9、28科目、コミュニケーション学科で11、45科目

(6) 科目の履修者数による比較

図9は履修者数（履修者が40名未満の科目と40名以上の科目）で分類した科目別の評価点を学科ごとに示したものである。なお、40名未満の科目には、演習形式の授業も含まれている。

分類した履修者が40名未満の科目および40名以上の科目の数は、心理学科ではそれぞれ9科目、28科目、コミュニケーション学科では、41科目、15科目であった。

心理学科は昨年度とは異なり、本年度は履修者数による違いが見られた。具体的には、40名未満が40名以上よりも各項目で高得点を出しており、受講者数が少ない授業の評価が高くなっている。同様に、コミュニケーション学科でも40名未満の科目の評価点が40名以上のそれよりも高くなっている。また、前節同様に両学科ともに授業方法の項目で高い評価点を出している。

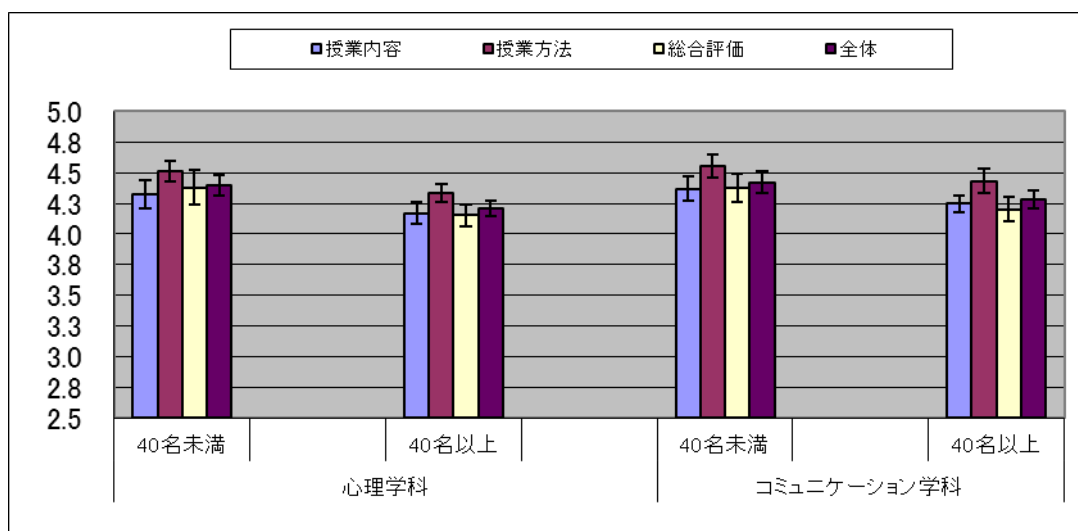


図9 受講生数による各科目の平均授業評価点（±SD）

40名未満、40名以上の科目数は、心理学科で9、28科目、コミュニケーション学科で41、54科目

次に、各授業科目の履修者数と「全体」の評価点との関連について、学科ごとに散布図と相関係数で示したのが、図10（心理学科）と図11（コミュニケーション学科）である。

心理学科では比較的高い負の相関が見られた（心理学科 $r = -0.43$ ，昨年度 $r = -0.06$ ）。昨年は履修者数によって授業評価点が変わらなかったが、今年は履修者数が少ない授業に高い評価点が付けられるという傾向が強くなった。また、コミュニケーション学科でも昨年度同様に負の相関（ $r = -0.19$ ，昨年度 $r = -0.46$ ）が見られた。

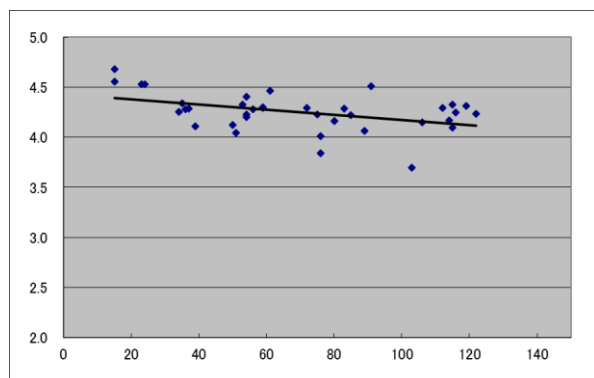


図10 心理学科 履修者数（横軸）と授業評価点（縦軸）との相関
 $r = -0.43$ ($n=37$)

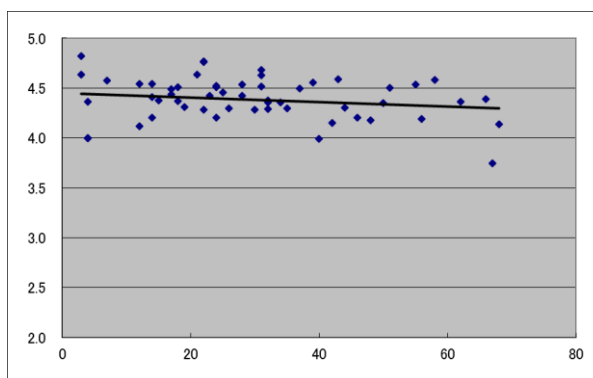


図11 コミュニケーション学科 履修者数（横軸）と授業評価点（縦軸）との相関
 $r = -0.19$ ($n=56$)

(7) 回収率

共通教養科目、共通語学科目および専門科目それぞれの授業評価アンケートの回収率を学科ごとに算出したものを図 12 に示した。それぞれの科目数は心理学科が 8、5、24 科目、コミュニケーション学科が 8、5、43 科目であった。昨年度と比べると、共通教養の回収率がかなり低くなっており、逆に共通語学と専門科目は回収率が高くなっている。昨年と比べると共通教養の回収率がかなり低く、7 割を割っている。一方で共通語学や専門科目はいずれも 7 割を超えている。

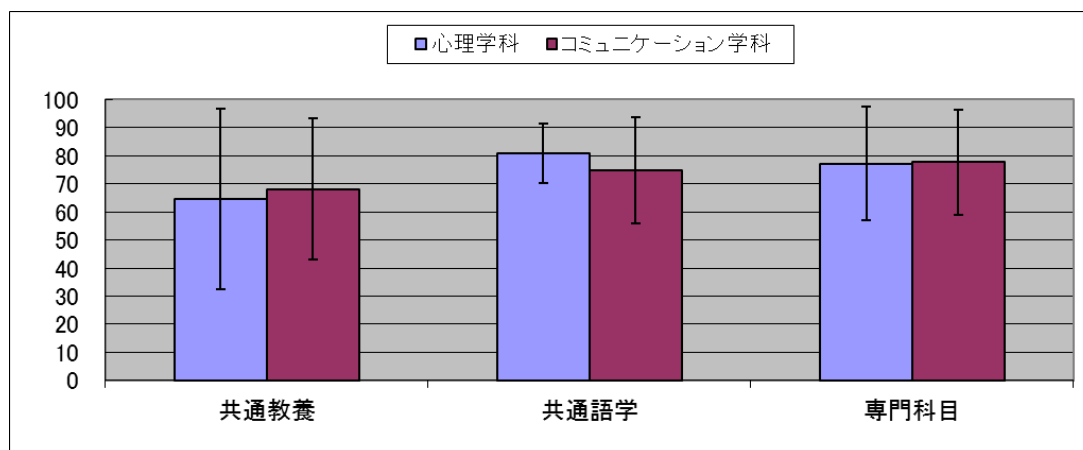


図 12 各科目の平均回収率 (±SD) (%)

それぞれの科目数は、心理学科で 8、5、24 科目、コミュニケーション学科 8、5、43 科目

(8) 学修時間と学修行動

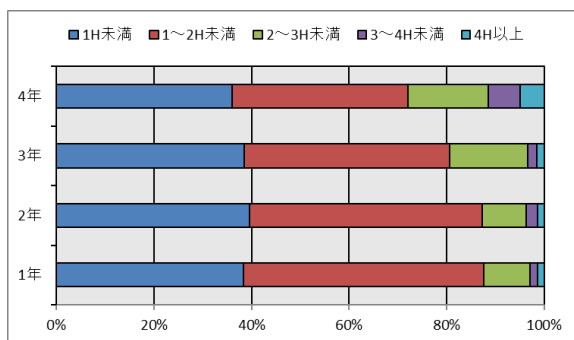


図 13 心理学科の授業外での学修時間

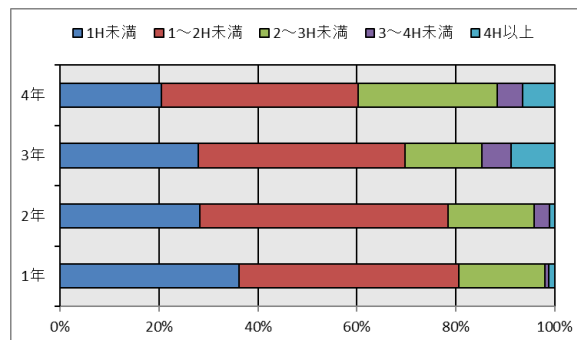


図 14 コミュニケーション学科の授業外での学修時間

各科目の授業時間以外での学修時間に関する項目について、学年別・学科ごとにまとめたものを図 13 および図 14 に示した。授業時間以外の学修時間とは、その授業に関する予習・復習に該当する。これによると、心理学科ではさほどおおきな変動は見られなかったが、コミュニケーション学科では 1~3 年の 1h 未満の学習時間が増えている。一昨年度までは両学科のどの学年においても 1h 未満の学生が大きな割合を占めていたのが、昨年は一転して学修時間の増加につながっていた。しかし、今年度は一昨年度の傾向の傾向と若干似通っている。ただし、コミュニケーションの 4 年だけ学習時間が増加傾向にある。これは卒業研究などを行う対面型のゼミ活動が増えたことと無縁ではないだろう。

今年度前期はコロナ禍が学修活動に少なからぬ影響を与えていたことは確かであるが、昨年度のそれと比較すれば随分影響が少なくなっており、それが学生の授業評価に反映されているように思われる。特に授業方法の項目では軒並み高い評価点がつけられており、対面型授業に戻ったことと強い関連があるといえるだろう。とはいえ、昨年度に各教員が経験し培ったオンライン授業のやり方や教材の提示方法を過去の遺物とするのではなく、学生の学修意欲と学修効果を高める多様なスキルを維持する必要もあると思われる。

最後に、両学科の学生が真摯にアンケートに答えてくれた証左として「無回答」の学生が皆無である点を指摘しておきたい。

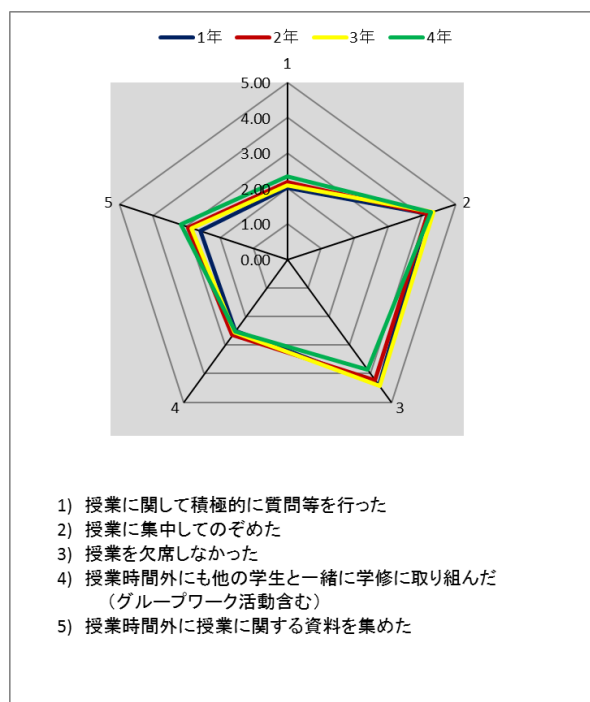


図 15 心理学科の学修行動

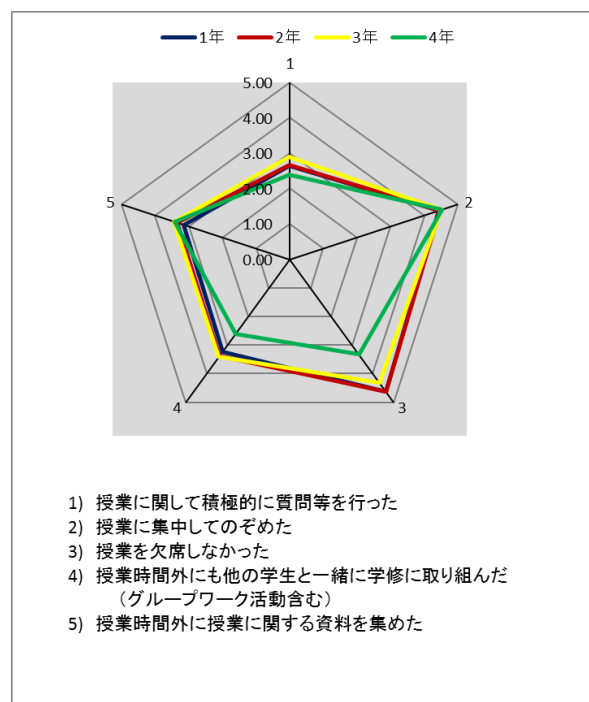


図 16 コミュニケーション学科の学修行動

各科目の学習行動における自己評価に関して、学科別にまとめたものを図 15 および図 16 に示した。今年はコロナ禍の影響により、従来のような授業形態を行うことが出来なかった影響で、一昨年度まで行っていた 7 項目の質問を 5 項目に減じて調査を行った。両学科とも、4 年生を除き、授業時間内での学修行動に関する評価は非常に高くなっており、まじめに授業に取り組んでいる姿勢が伺える。特に「4」授業時間外に授業に関する資料を集めたの項目では、心理学科では上昇している。レポート課題の提出が多く授業で求められていることが大きな要因であると思われるが、コロナ禍での受講という学修形態による影響が良い方向で現れたものと推測される。昨年度までの傾向とは異なるこの点については、学生がより一層授業外での学修方法に取り組むためにもより良い授業のあり方、オンライン授業や面接型授業の選択や両方のハイブリッド化などをふくめて様々な対応が必要であると思われる。

何れにせよ、今年度前期はこれまでと全く異なる対応を教職員と学生が経験せざるを得なかったが、コロナ禍での経験を奇貨とするためにも今回のアンケート結果を精査し、次年度以降につなげていく必要があるだろう。

(報告：江南健志)

令和3年度 前期末 人間生活学部

授業評価アンケート調査、学修時間等に関する報告

はじめに

本報告は、令和3年度前期に開講された科目の内、学生による授業評価が実施された94科目についてまとめたものである。分析の対象としたアンケート項目は、学科及び学年を問う2項目、授業及び学修に関する15項目（評価基準は1～5点）の計15項目で構成されている。内、授業及び学修に関する計15項目の設問を、以下の分類①～⑤の設問群にまとめ、各値を算出した。

- 設問群①：「授業内容」 4項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点
- 設問群②：「授業方法」 2項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点
- 設問群③：「総合評価」 4項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点
- 設問④：「学修時間」 1項目（1h未満、2h未満、3h未満、4h未満、5h以上）の比
- 設問群⑤：「学修行動」 4項目それぞれの平均点

これらを学科、学年、共通科目、専門科目などの観点から算出し、図示した。なお、設問群①～③は「全体」として10項目の点数合計に対する1項目あたりの平均点を算出している。また、他の代表値を用いた方が好ましいと考えられるが今回は平均値を利用し、特に解析も実施していないため、あくまで結果の提示に留めることとする。縦断的な理解のために昨年と比較する場合は、「令和2年度仁愛大学FD推進活動報告書」を御覧ください。

（1）共通教養科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において7科目から回答を得た（図1参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が92名、2年生が42名、4年生が1名であった。

1・2年生共、全項目の平均点は4.3程度で項目別評価は「授業方法」が高く、その他、4.0程度であった。

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において6科目から回答を得た（図2参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が85名、2年生が28名、3年生が0名、4年生が2名であった。

1・2年生で、全項目の平均点は4.0程度で項目別評価は「授業方法」が高く、2年生の「授業内容」がやや低かった。

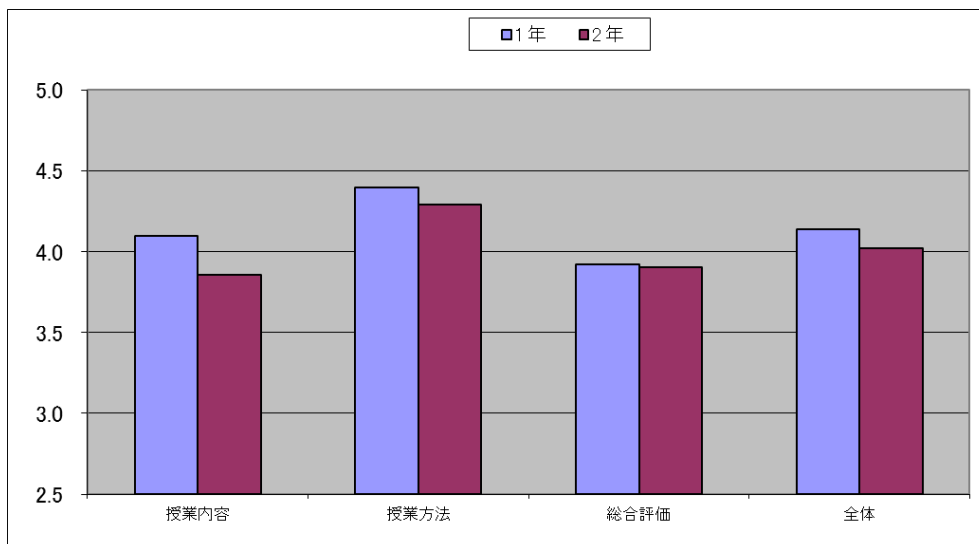


図1 健康栄養学科の共通教養科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=92名、2年=42名

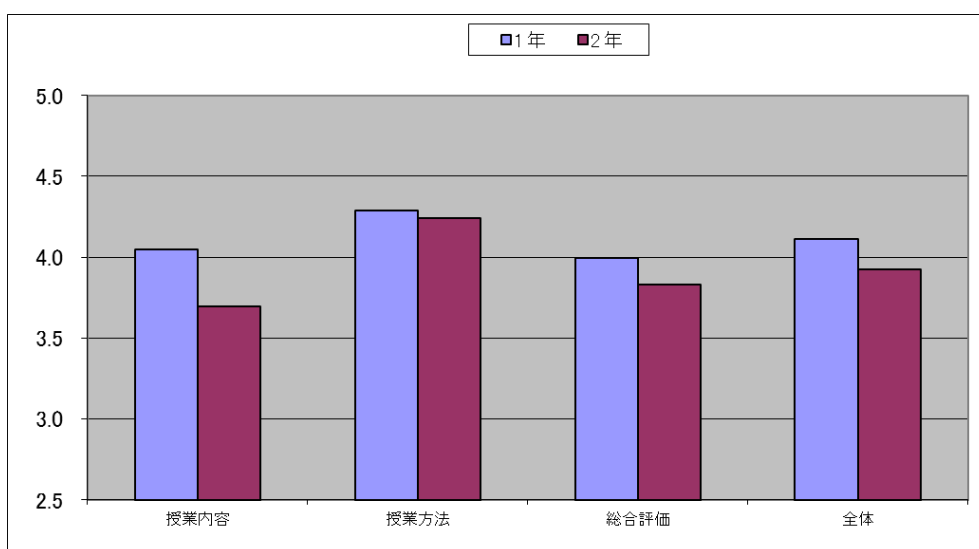


図2 子ども教育学科の共通教養科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=85名、2年=28名

(2) 共通語学科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）において7科目から回答を得た（図3参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が71名、2年生が13名であった。

1・2年生共に、全項目の平均点はおおよそ4.0以上で、2年生の「授業方法」が4.5を上回っていた。

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語）において8科目から回答を得た（図4参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が79名、2年生が29名、3年生が1名、4年生が1名であった。

1年生の「授業内容」と「総合評価」が4.0を下回り、全項目の平均点は4.0以上であった。

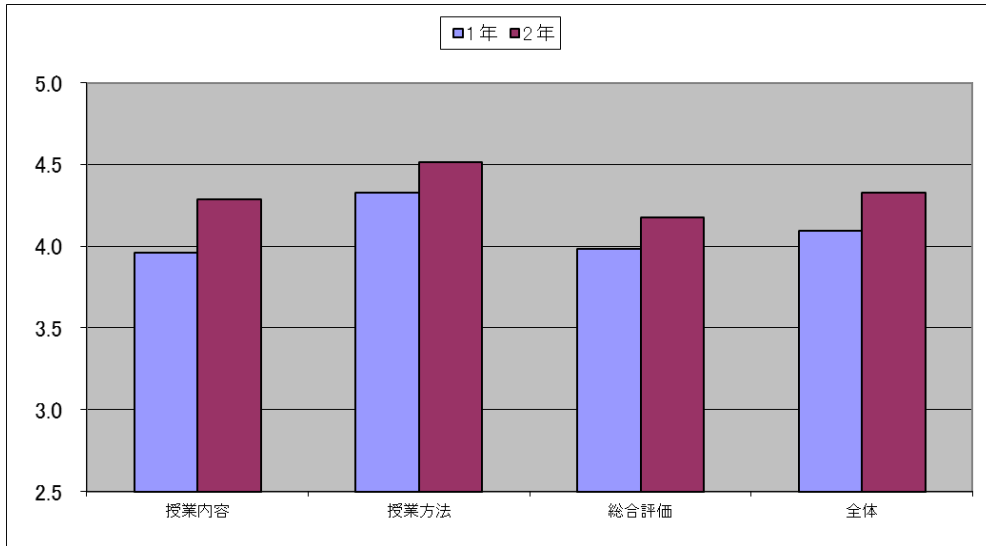


図3 健康栄養学科の共通語学科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=71名、2年=13名

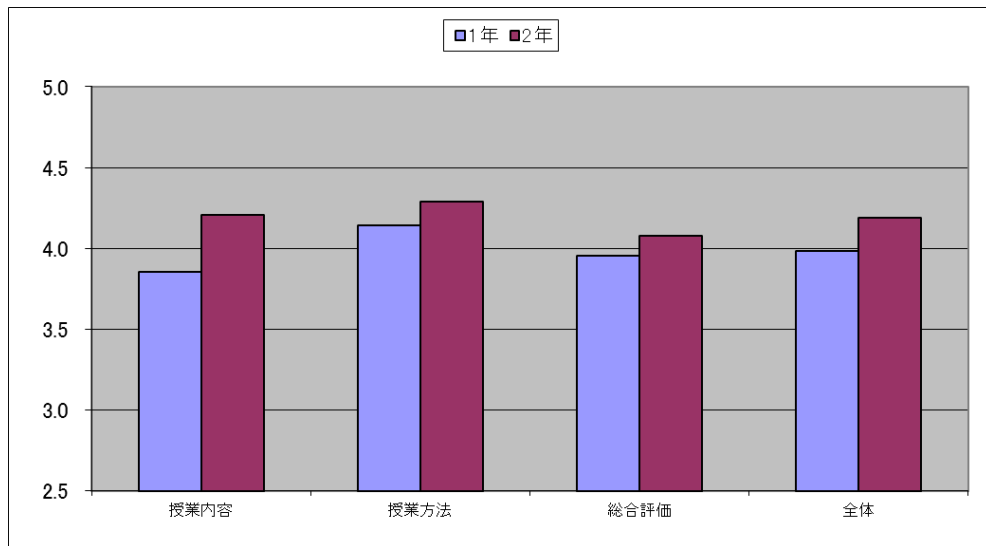


図4 子ども教育学科の共通語学科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=79名、2年=29名

(3) 専門科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する専門科目において 38 科目から回答を得た (図 5 参照)。延べ回答人数は、1 年生が 346 名、2 年生が 368 名、3 年生が 322 名、4 年生が 22 名であった。1 年生の「授業内容」を除き、全ての設問の平均点が 4.0 以上であった。学年が上がるにつれ、評価が高くなる傾向がみられた。

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する専門科目において、37 科目から回答を得た (図 6)。述べ回答人数は、1 年生が 251 名、2 年生が 311 名、3 年生が 244 名、4 年生が 51 名であった。

4 年生以外、全設問の評価が 4.0 以上であったが、4 年生の評価が 4.0 以下のものが多かった。

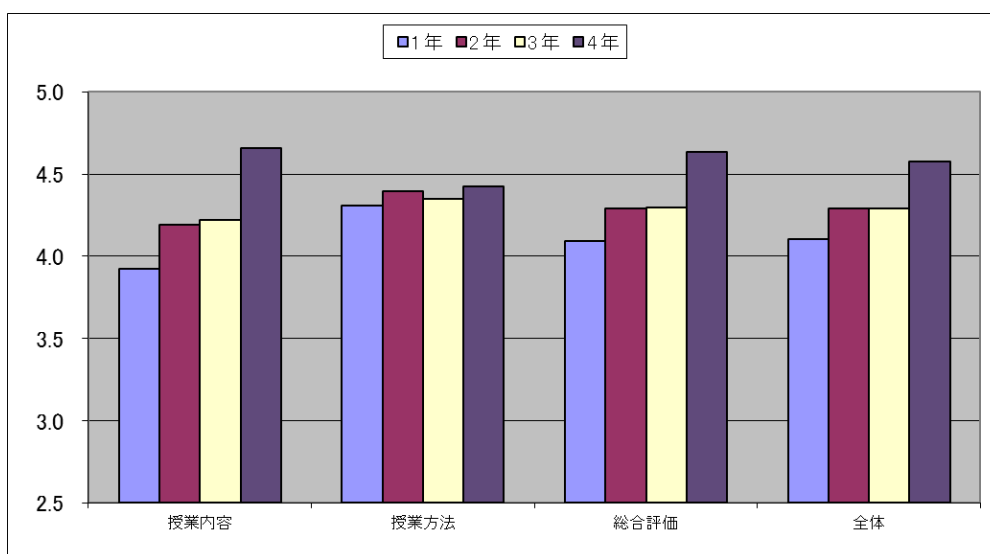


図 5 健康栄養学科の専門科目に関する授業評価点

延べ人数 1 年=346 名、2 年=368 名、3 年=322 名、4 年=22 名

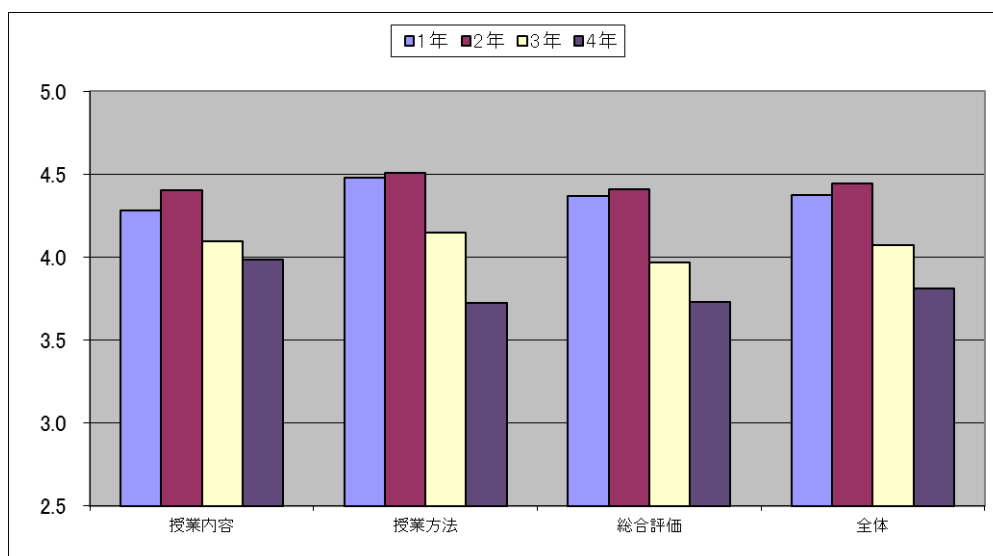


図 6 子ども教育学科の専門科目に関する授業評価点

延べ人数 1 年=251 名、2 年=311 名、3 年=244 名、4 年=51 名

(4) 科目の種類ごとによる比較

科目を以下の3つの観点から比較した。これらの観点は、授業に対する学生の意識の高さが授業評価の差異へ大きく影響すると考えられる。

- ・ 共通科目と専門科目
- ・ 必修科目と選択科目
- ・ 受講生が40名未満の科目と40名以上の科目

[共通科目と専門科目の比較]

図7は、共通科目と専門科目について対象学生を学科別に集計したものである。調査対象総科目数は86科目である。なお、学部共通科目6科目は両学科の学生がほぼ半数ずつ履修しているため、調査対象から除いている。

健康栄養学科では、共通科目と専門科目の各設問の平均評価点は、共通科目の「授業方法」4.4程度を除いて4.0~4.3の範囲内で上下がある結果で、専門科目が共通科目に比べばらつきが小さく、共通科目への評価の個人差が少ないようであった。

子ども教育学科では、昨年度と同様の傾向で、すべての設問において共通科目より専門科目での評価が高く、共通科目は全設問の平均評価点が4.0程度、専門科目は4.3程度であった。

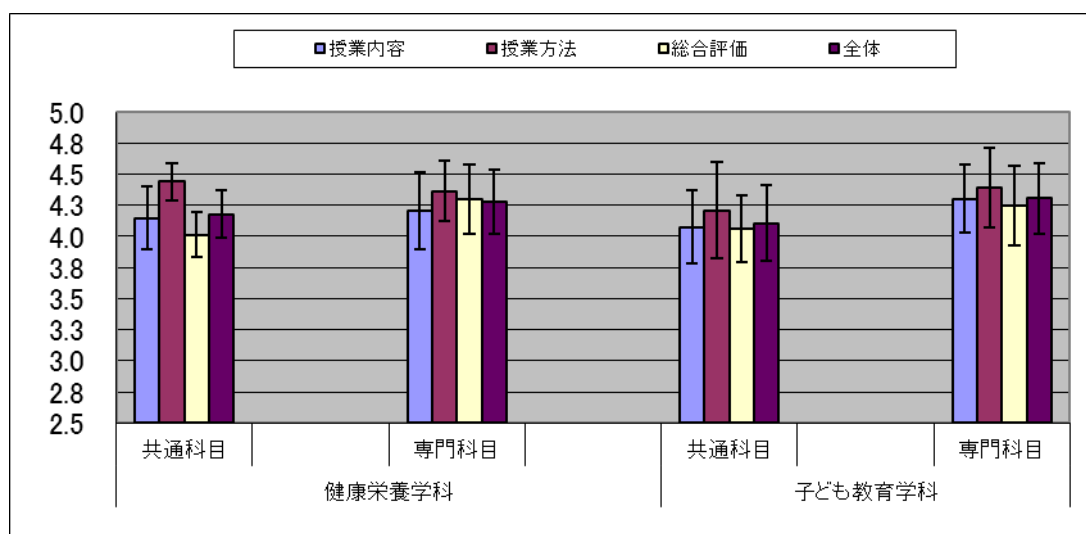


図7 共通科目と専門科目別の平均授業評価点 (±SD)

共通科目と専門科目数は、健康栄養学科で6、38科目、子ども教育学科で6、36科目

[必修科目と選択科目の比較]

図8は、必修科目と選択科目について、対象学生を学科別に集計したものである。総科目数は86科目である。

健康栄養学科では、必修科目と選択科目の各設問の平均評価点は4.3程度であり、「授業内容」のみが4.3未満であり、傾向は類似していた。

子ども教育学科では、必修科目と選択科目の各設問の平均評価点は4.3程度であり、「授業内容」のみが4.3未満であり、傾向は類似していた。

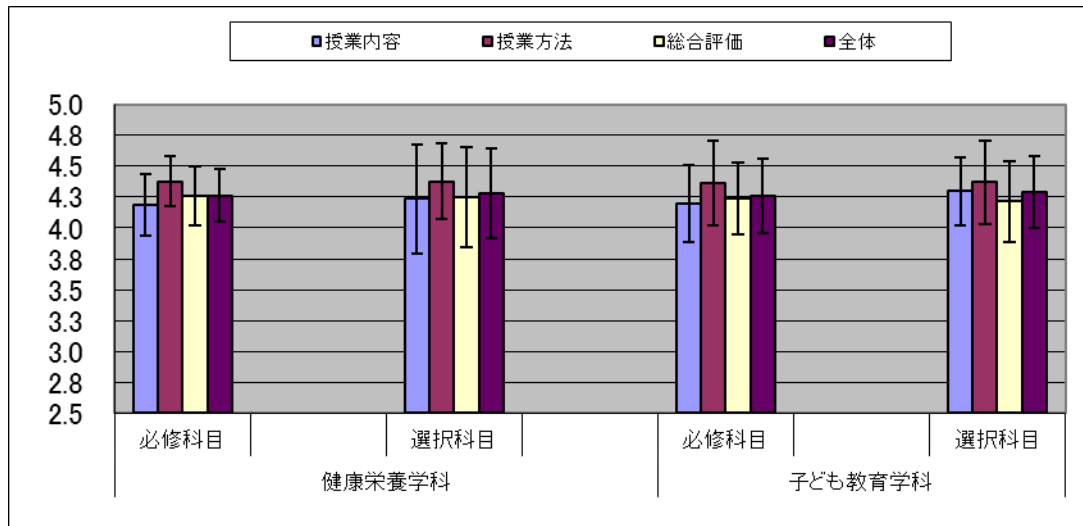


図8 必修科目と選択科目別の平均授業評価点 (±SD)

必修科目と選択科目数は、健康栄養学科で 33、11 科目、子ども教育学科で 11、31 科目

[受講生数による比較]

図9は、受講生が40名未満と以上で学科別に各項目について集計したものである。総科目数は86科目である。

健康栄養学科での各設問の評価は、40名未満ですべての設問の評価平均評価点は、4.3程度で、40名以上に比べやや高めの平均評価点を示していた。

子ども教育学科での各設問の平均評価点は、40名未満と以上ともにすべての設問の評価が4.3程度であった。

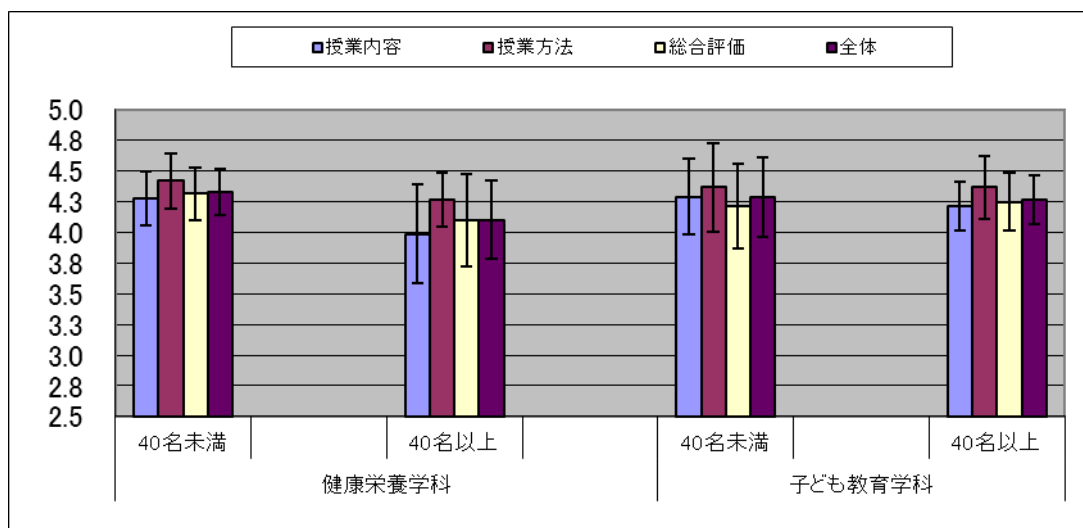


図9 受講生数による各科目の平均授業評価点 (±SD)

40名未満、40名以上の科目数は、健康栄養学科で32、12科目、子ども教育学科で30、12科目

[科目個々の受講者数と評価点との関係]

図10~12は、学部全体および各学科での、受講者数と評価点との相関をみるために作成した散布図である。全体の相関が $r = -0.23$ であった。学科別にみると健康栄養学科は $r = -0.31$ 、子ども教育学科は $r = 0.15$ であった。

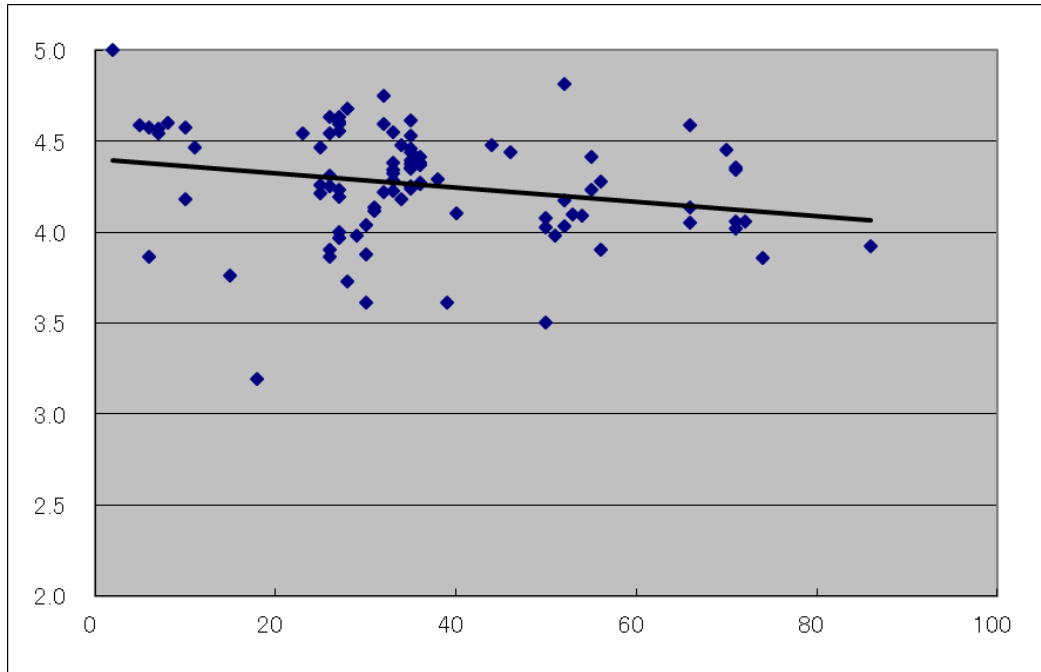


図10 人間生活学部 履修者数 (横軸) と授業評価点 (縦軸) との相関
 $r = -0.23$ (n=94)

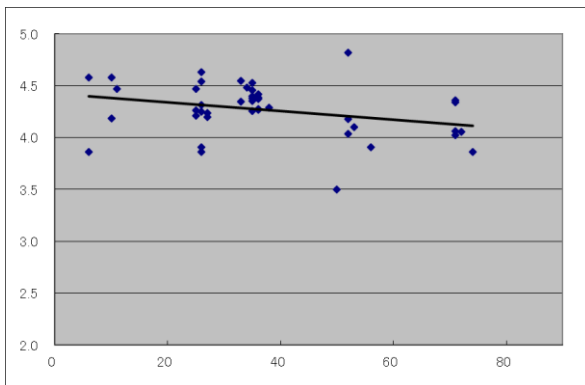


図11 健康栄養学科
 $r = -0.31$ (n=44)

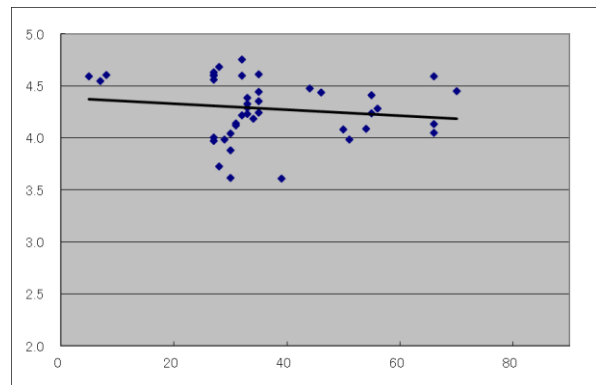


図12 子ども教育学科
 $r = 0.15$ (n=42)

[各科目の回収率]

共通教養科目、共通語学科目および専門科目における授業評価アンケート回収率の平均を学科ごとに算出した結果を図13に示した。それぞれの科目数は、健康栄養学科が3、3、38科目、子ども教育学科が3、3、36科目であった。それぞれ分類された科目種別における回収率の平均は、例年、共通教養科目・共通語学科目は両学科とも90%以上であったが、健康栄養学科の「共通教養」を除き70~80%程度であった。一部オンライン授業であったが昨年に比べ多少改善傾向がみられた。

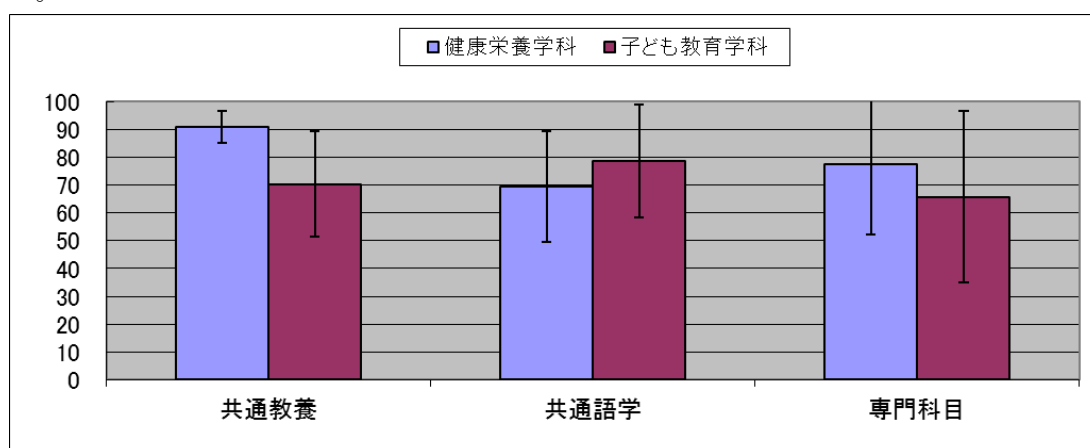


図13 各科目の平均回収率 (±SD) (%)

それぞれの科目数は、健康栄養学科で3、3、38科目、子ども教育学科で3、3、36科目

(5) 学外での学修時間

[健康栄養学科]

図14は、健康栄養学科における授業外での学修時間を集計したものである。延べ回答数は1年生が509件、2年生が423件、3年生が324件、4年生が22件であった。例年に比べると、1時間未満がどの学年でも減少しており、それ以上の学修時間が増えている様子がうかがえた。これもオンライン授業の影響だと考えられる。

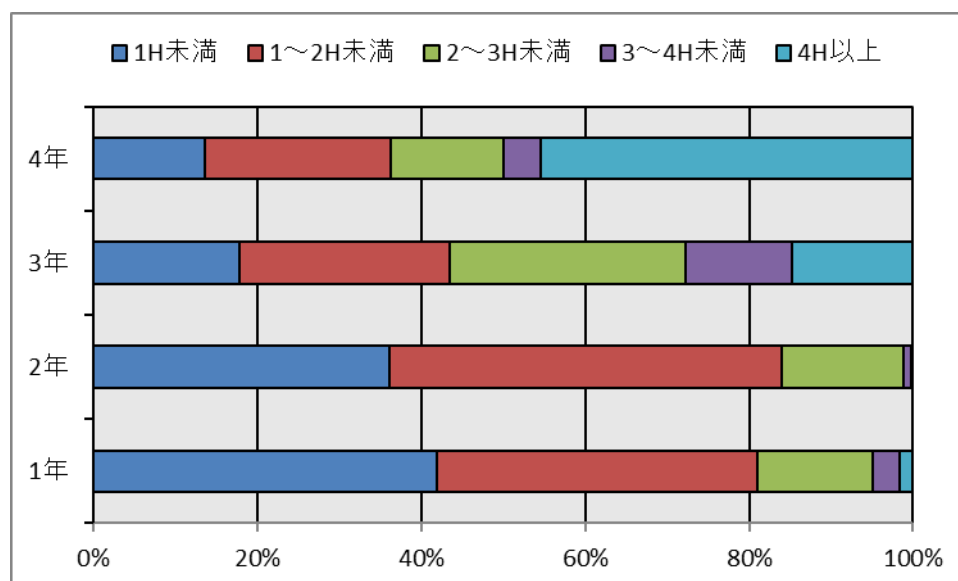


図14 健康栄養学科の授業外での学修時間

[子ども教育学科]

図 15 は、子ども教育学科における授業外での学修時間を集計したものである。述べて回答数は、1年生が415件、2年生が368件、3年生が245件、4年生が54件であった。1時間未満の比率が減り、1～2時間未満の割合が増えている様子が見えてきた。

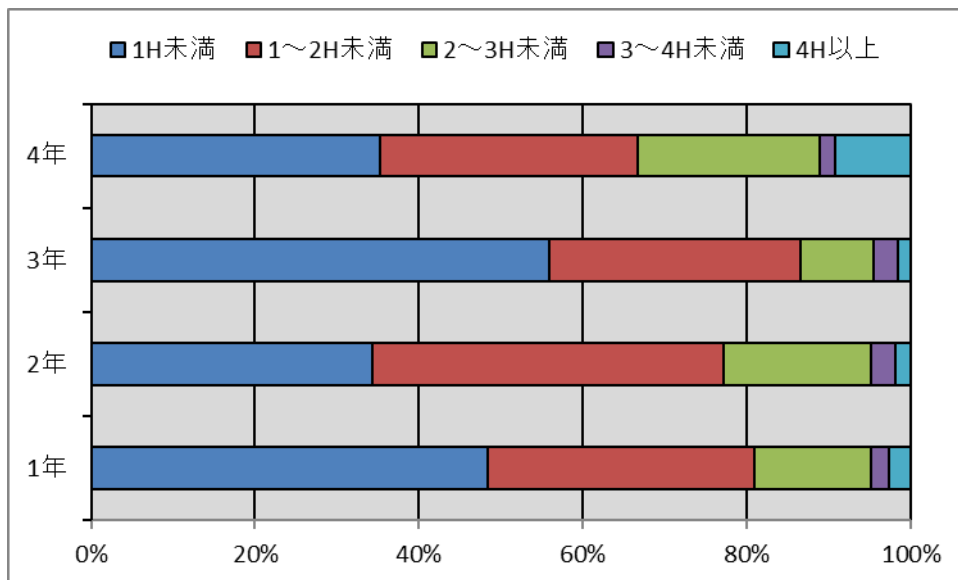


図 15 子ども教育学科の授業外での学修時間

(6) 学修行動について

[健康栄養学科]

図 16 は、健康栄養学科での学修行動について学年別に比較したものである。「授業に関して積極的に質問を行った」、「授業時間外に授業に関する資料を集めた」は学年が上がるにつれ、高い値を示す傾向であった。

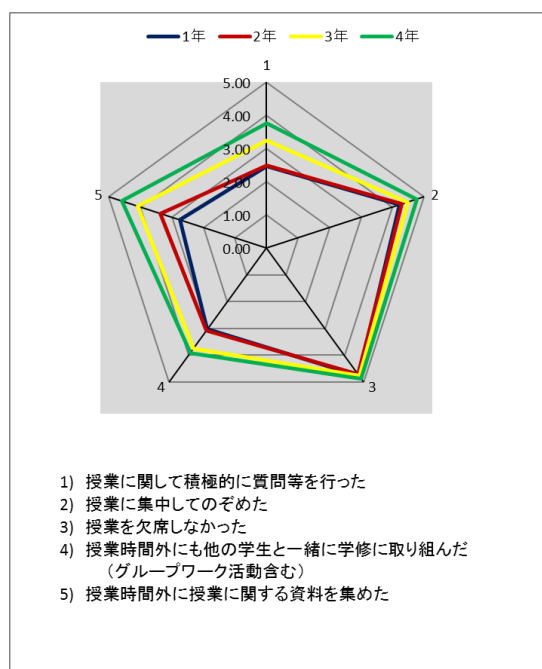


図 16 健康栄養学科の学修行動

[子ども教育学科]

図 17 は、子ども教育学科での学修行動について学年別に比較したものである。「授業時間外に授業に関する資料を集めた」が例年に比べ、少し高い傾向がみられた。

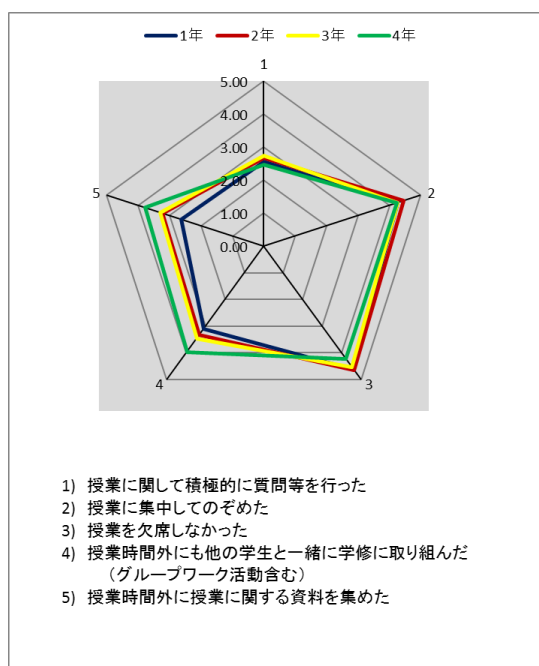


図 17 子ども教育学科の学修行動

(7) まとめ

本年度前期における人間生活学部の授業評価アンケート結果を様々な角度から集計し概観した。昨年度前期と同様、概ね例年通りであった。COVID-19 の感染拡大状況にあわせ、授業形態が全面オンライン授業となったり、対面授業となったり、何度か授業形態が変更になったことや長引く自粛期間の影響が少なからずあったと考えられたが、各教員の創意工夫により、授業の質が保たれたと考えられる。厳しい状況ではあるが、より良い授業を引き続き模索していくことが大切と考えられる。

(報告：出村 友寛)